

諏訪内晶子が芸術監督を務める「国際音楽祭 NIPPON 2026」。盟友、サッシャ・ゲツツエルは、前回の2024年に続いてフェスティヴァル・オーケストラを指揮し、ハイドンの交響曲第39番と、モーツアルトの交響曲第40番の二つのト短調交響曲を演奏する。モーツアルトの40番を中心に、「調」の綾なす名曲の世界を語つてもらつた。



国際音楽祭 NIPPON の2月演奏会で指揮

聞き手 藤盛一朗 ○ 本誌編集

モーツアルト40番 サッシャ・ゲツツエルの語る

「ト短調は運命と死を表す」

—— 演奏会のテーマは、ト短調だと感じられます。

ハイドンは、交響曲第39番で新しい「言語」を見出そうとしました。不協和音という相反するものが作り出す緊張の瞬間。ハイドンは、音が解

くフルテの和音は、叫びです。自分との闘い。時間との闘い。いっぱい、いっぱいになり、エモーショナルな限度に達しているのです。

—— この交響曲は、39番の変ホ長調、41番のハ長調と同時期に作曲されたと言われます。なぜ、この曲だけが悲劇的な

そのことは私も関心を抱いてきました。まずは41番のハ長調ですが、この調は無限のシンボルです。ハ長調は、すべての調の真ん中に位置するからです。

モーツアルトの天才性は、瞬間のひらめきにあります。『ドン・ジョヴァンニ』序曲は、公演の初日の前夜に徹夜をして作曲されたくらいです。アーノンクールは、この3曲でモーツアルトは自分のレクイエム作品を作ろうとしたのだと考えました。

—— では、39番の変ホ長調は何を意味するのでしょうか？

モーツアルトの場合、調は大変シンボリックです。『魔笛』はフリー・メイソン(秘密結社)と結びついていてそれが明らかですが、タミーノが試練を受ける。その場面が表すフリー・メイソンの見習いはファ、徒弟はシリ、そして(高位の)マイスターが変ホ長調です。『コジ・ファン・トゥツテ』ではフィオルディリージの決意や純粹な心を表すアリアが変ホ長調です。



上 交響曲第40番第2楽章に現れる下行音型を紙を使って説明するゲツツエル

公演情報

サッシャ・ゲツツエル指揮
国際音楽祭 NIPPON フェスティヴァル・オーケストラ
諏訪内晶子(ヴァイオリン)
2月11日(水祝)17:00 横浜みなとみらいホール 大ホール
●ハイドン: 交響曲第39番 ト短調 Hob.I:39
●ハイドン: ヴァイオリン協奏曲第3番「メルク協奏曲」イ長調 Hob.VIIa:3
(ヴァイオリン:諏訪内晶子)
●アルヴォ・ペルト: フラtres (ヴァイオリン:諏訪内晶子)
●モーツアルト: 交響曲第40番 ト短調 K.550
問)ジャパン・アーツ 0570-00-1212

晶子は純粹な音楽家です。楽譜を尊重し、聴衆にどう伝えるかを謙虚な気持ちで考えます。2024年にモーツアルトの協奏曲で共演した時には、フレージングや装飾音についてずいぶん話し合いました。あれだけのキャリアを積んでいながら、表現を誠実に探究し続けています。諏訪内晶子がソロを弾くベルトの『フラtres』は、ベルトが世間から隔絶し、67年にわたる精神の鍛錬を経て初めて作曲した作品です。

—— 諏訪内さんは、ジュリアード音楽院の学生時代からのつながりどうかがつています。

晶子は純粹な音楽家です。楽譜を尊重し、聴衆にどう伝えるかを謙虚な気持ちで考えます。2024年にモーツアルトの協奏曲で共演した時には、フレージングや装飾音についてずいぶん話し合いました。あれだけのキャリアを積んでいながら、表現を誠実に探究し続けています。諏訪内晶子がソロを弾くベルトの『フラtres』は、ベルトが世間から隔絶し、67年にわたる精神の鍛錬を経て初めて作曲した作品です。



Sascha Goetzel

ウィーン生まれ。ヴァイオリニストとしての教育を受けつつ、指揮をリチャード・エスター・ライヒャーとヨルマ・パヌラに師事。その後、米国にて小澤征爾、ムーティ、プレヴィン、メタ、ハイティンクらの熏陶を受ける。フランス国立オワール管弦楽団音楽監督、クラコフ・フィル首席客演指揮者。ウィーン国立歌劇場に客演し、この12月には都響の第九公演を指揮した。

決しないことに挑戦しようとしました。曲の始まりからして、不協和であり、聴く者は何が始まったかと思う。そして、全休止です。ただならぬ緊張が生まれます。ト短調のアイデンティティは、運命と死。モーツアルトの『ドン・ジョヴァンニ』の調、二短調も同じです。

まず基本としてあるのは、楽譜を理解することです。モチーフをとらえ、歌いまわしや音色に配慮することがあります。ゲツツエルさんは、ウィーンの曲をとっても、それが基本です。40番に限らない話ですが、ある時の演奏で始めて2分でミスが起きた。奏者にはアドレナリンが生じ、結果として素晴らしいものとなるということがあります。完璧に進んで逆に、演奏が凡庸になることもあります。それが演奏の難しさです。

この40番は、モーツアルトの(死の3年前という)後期の作品です。17歳の時の作品のようには演奏してはいけない。その間に、モーツアルトの人生にはさまざまなことがあったのです。演奏にはその知識が必要です。40番の冒頭は、何かから逃亡しようと/or/しているかのようです。自分自身や人生にショックを受けている。続

無調になる部分があります。新ウイーン楽派のような20世紀を指している。考えられないアイデアです。フガートになると、もつと、もつと対立(不協和音)をというかのよう。するりーゼ。18世紀に戻りました、とばかりに主題が回帰します。こうした展開が想像できないくらい素晴らしいです。

—— 終楽章は、悲劇的です。

やはりト短調ですが、運命を表していると思います。そして解決しないままに終わってしまいます。オーピン・エンドです。

—— 諏訪内さんは、ジュリアード音楽院の学生時代からのつながりどうかがつています。

晶子は純粹な音楽家です。楽譜を尊重し、聴衆にどう伝えるかを謙虚な気持ちで考えます。2024年にモーツアルトの協奏曲で共演した時には、フレージングや装飾音についてずいぶん話し合いました。あれだけのキャリアを積んでいながら、表現を誠実に探究し続けています。諏訪内晶子がソロを弾くベルトの『フラtres』は、ベルトが世間から隔絶し、67年にわたる精神の鍛錬を経て初めて作曲した作品です。